

カゴ大学原子核研究所内に特別の装置を持つ実験室を設けて一九四九年以来計測に従事した。計測に用いた標本は大多数が合衆国内から提供されたものであるが、英、仏、独、丁、株、トルコ、エジプト、イラン、西アフリカ、日本、メキシコ、カナダ、アラスカ其他から送られた重要なものが少くない。そして各項毎に簡単な記述があつて、標本の出所、順序関係、既存の年代標等を明示してある。

以上の表に続いて、夫々の権威者による専門分野の放射性炭素年代に関する批判が簡草に記してあるのは、頗る有益である。F. H. H. Roberts の「アメリカ最古の人類」W. S. Wash の「合衆国南東地区」H. de Terra の「フランスのラスコ洞窟」R. J. Brindwood 其他の「近東並に中東地方」J. Bird の「南米」等の諸編がある。また最近二万五千年の地質学的堆積に対する年代測につき R. F. Flint が、ボーレン年代法に対する放射性炭素年代の關係につき E. S. Deevey が夫々議論を開展している。そして是等諸学者の合評を以て總括とする。

附載の文獻中には、物理学専門雑誌の名も

挙つてゐるから、技術上のことを知ろうとする際に充分役に立つ。

今やこの年代法は実験の域を過ぎて、年代の分らない遺物に正確な年数を与える段階に來ている事は疑いない。而も未だ資料の汚染に対する処置の如き、根本的な問題が解決されていないので、考古学、地質学、植物学の専門家との間に慎重な忍耐強い協力が要だと思ふ。そう云う将来の問題に就いても、本書は正しい示唆を与えてくれる。

本書の創始者 Willard F. Libby 博士も同じ標題の単行本 Radicarbon Dating を University of Chicago Press から 1952 年に出版(価 \$3.50)した事を附言する。(六五頁 価 \$1.50) — 有光教 —

Max. Sorre : Les Fondements de la Géographie Humaine.

Tome I. Les Fondements Biologiques (1948).  
Tome II. Les Fondements Techniques (1948~1950).

一九四三年から一九五二年にかけて、ソル

ボンヌ大学教授 マクシミリアン・ソルは驚歎すべき労作をこの世に送つた。題して「人文地理学の基礎」であり、全四冊、二千頁よりなる三部作「第一巻「生物学的基礎」、第二巻「技術的基礎」、第三巻「居住地及び一般的地論」である。

この書を取上げて取上げた所以は、すでにわが国の地理学界にも辻村太郎博士や木内信藏博士によつて紹介されただけではなく、知る限りによつて Geographical Journal や Geographical Review や Annales de Géographie にもかなりの数の論評が寄せられておりこの書が広く世界の地理学界に多くの問題を提起し、センセシヨナルな興奮を盛り上げて行つた事情によつて、多大の興味と共感を呼びおこされるに至つた為である。しかしながら正直なところ、この膨大な書の批判には多くの時日を要することであらうし、ましてや評者自身の学問の経験や語学的才能を以つてしては容易の業ではない。ただ遺憾ながらこの労作を前にしてあまりにもみじめな自己の学問内容をひたすら恥するばかりであり、書評というよりも拙撰な紹介に終るであ

らうことを最初にお詫びしなければならぬ。尚第三巻に限り未だ披見の機会がえられなかつたので割愛することとする。

第一巻「生物学的基礎」は、副題に示されたように「人間の生態学的研究」がその一貫したテーマとして展開される。その第一部は自然環境としての気候を取上げ、その分布並びに気候要素が、人間の生活条件や生物学的機能に及ぶ影響を詳述し、空間的地理的な視角からは、「エクメネーの形成」と称する第三章をあてている。即ちこの章では、エクメネーの極における限界と高度的限界を述べた後、質的な内容として居住空間の非連続性と異質性が説明される。更に居住空間内に分布する人間に対する気候の關係の仕方として、気候の人類特徴に及ぶ影響、気候順化、特に白色人種の熱帯植民に伴う問題等が詳述されるのである。ついで第二部の「生物環境と人間の食糧」は、人間の食糧としての意義を有する動植物環境についての総合的な考察の部分である。先ず「家畜や栽培植物が人間の association を形成する」(p.121) 事実から出発し、それらの起原、飼育、栽培の進

歩、世界地域における夫々の發展過程が具体的に論ぜられてゐる。同時に「野生種から育成種へ」と、人間の積極性の芽生えと共に派生する栽培植物・飼育動物に関する種々の問題、並びに association の存続・平衡の問題が取扱われる。最後に、以上の「すべての考察は、人類生態学の中心課題である食糧の問題に集中する」(p.219) という立場から有機体の必要とする營養素及びビタミン等の研究対象を生物環境の中に位置づけつつ展開し、「食糧の地理」として広く世界各地の地域差や、都市生活、村落生活に伴う食生活の差異等を述べつつ第二部を結んでゐる。第三部は「生物環境に戦をいどむ人体組織」として、人間の生活環境と病理との關係、即ち疾病地理についての極めて綿密な報告であり、豊富な医学的データの地理的な把握によつて貰かれたこの部分は、それだけに医学的なかなりの智識を前提しなければ読み下せない章節が多く、遺憾ながらここでは触れないことにしたい。

第二巻は二冊よりなり、「技術的基礎」なる命題のもとに展開されるエッセイである。

その内容としては「社会生活の技術」・「技術とエネルギーの地理」・「空間の征服」・「生産と原料加工の技術」の四つの部分が盛られ、評者自身の専門もこの部分に包括されるが為に最も興味を覚えたという個人的な偏好と恣意によつて、この第二巻を紙面の許す範囲においてやや詳細にみて行きたい。

その内容を逐一検討するに先立つて、いわば政治地理学・社会地理学・経済地理学等の各分野にまたがる専象を総合させる意図の下に、ソルがここに用いた「技術」的基礎なる言葉の意味にまず注目しなければならないだらう。この第二巻の内容に一貫して与えられている立場は、彼自身のいうごとく、「地球を征服し、居住空間を改変させて行く為の、あらゆる種類の發明力と主導権を所有している人間」(p.9) を中心課題として取上げることである。したがつて技術なる言葉も「最も広義に解され、機械的適用にとどまつた狭義の意味」(p.9) には制約されない。即ち「人類活動のあらゆる領域における産業・芸術に関する一切」(p.9) にまで適用の範圍が拡張されるとするのである。このような立場に

立つた上で「技術的基礎」なる概念が第二卷を統一する為の命題として使用されているのである。

最初の第一部「社会生活の技術」では、以上のような観点から、「社会的技術に関する二三の基本的与件」として、言語地理、政治地理、宗教地理、人口地理、戦争地理等に関連する広汎な基礎が前提として提出され、その上で「近代国家に先だつ集團」「民族と国家」「政治的・経済的構造と地理学」「帝国」の四つの問題が、社会のいかなる面も等閑にされることなく検討されて行く。先ず近代国家以前の集團として、歴史的には原始民族の horde, clan, famille, village 等の類似概念のもつ複雑性にふれ、生活様式の相違に基づく採取・狩獵・漁撈・移動耕作・定着農業各経済における氏族・種族の問題や、都市国家に關する記述を網羅する。それらは数多くの豊富なデータをもととし、空間的な觀察によつて導かれている為、充分地理学的であるが、更に後半は南スラヴ民族の「大家族集團と家族構成」にはじまり、「極東とコロンブス以前のアメリカ」・「インドとヨーロッパ」・「ハ

ルベル世界の協同体生活」等の項目にみられるように、地域毎の特殊な社会形態が追求されるのである。次に「民族と国家」は純粹に政治地理的な範疇に含まれるといえよう。兩者の基体 (substrat) を扱つた節では、たとえば過去のケルト民族やポーランド民族を例にとり、民族と国家の構成内容や組成の相違を詳述する。そして従来屢々研究テーマとなつた「地理的環境と国家形成」や位置・空間・フロンティアの問題の外、更に国家生活・中央集権と地方主義・弱少数民族等の項目も彼の研究対象として取上げられているのである。

この傾向は次章の「政治的・経済的構造と地理学」に移行するにつれて強められ、従来あまり地理学では扱われなかつた階層分化・奴隸制度・資本主義・独占・恐慌等の課題にまで野心的な開拓がなされて行く。その場合、ともすれば犯され勝な地理学的觀察よりの逸脱も、根強い学問的な立場と、客観的な豊富なデータの提供によつて救われているといえよう。ともかくも最後の「帝国」の章が、単に植民地理に限られることなく、植民に伴つて齎される植民帝国と原住民双方の利害に言

及し、更には帝国主義諸國間の係争の現実的な問題を、たとえば中近東を係争の場として取上げて論及するあたり、地理学とヴィヴィッドな政治事象との關係に向けられた著者の旺盛な研究の意欲を窺ふとることが出来る。

第二部「技術とエネルギーの地理」の内容は、最も身近な人間労働と畜力を取上げた第一章「生物的动力」、世界における労働力の地域的性格や、プランテーション労働力、工業労働を対象とした第二章「現実における人間労働の地理的諸問題」、太陽・火・風・水流等に發し、石炭・石油に至る天然エネルギー資源に關する諸々のテーマを扱つた第三章「天然エネルギー資源の地理」、及び第四章「天然資源利用の初期の形態」等からなり、最後に第五章「技術の發達とエネルギーの地理」で以つて終つてゐる。ところで以上は要するに構成の根幹を示したにすぎないといえよう。何となれば、言葉の本来の意味における人文地理学そのものではなく、人文地理の基礎を考察の対象とする著者の立場から、著者が最大限の範圍に彼の権利を擧げているこ

とがとりわけこの第二部で顕著な傾向として現れているからである。即ち第二章に述べられているように、アジア地域を労働力過剰の地域として定義したり、工業の発達に伴つて惹起される工業人口の集積を研究対象とすることは、充分地理学本来の方向を辿るものであるが、これに反して第一章に述べられた人間動力についての考察や、奴隷労働と自由労働の比較、或いは第三章の石炭・石油等の生成の項等は、或る意味で人文地理学の「基礎」としての意義を持つ部分であらう。このように第二部はともすれば人文地理学のエンサイクロペディアになる危険性を多分に蔵しながらも、著者自身の批判精神の確実性と秀れた地理的感覚によつて支えられ、独自の体系を伴いつつ概論として価値を豊かに保つているのである。

独自の体系が顕著に見出せる以上の部分に比較して、第三部「空間の征服」はいわば旧来の広義の交通地理学に相当する内容によつて占められ、その構成も平凡である。即ち第一章「一般の原理」で交通現象をエクスメナーの拡大との連関において把握することの必要

性、交通の経済的意義、政治的・文化的機能、交通手段、道路等にふれた後、第二章以降は陸上交通・海洋交通・航空交通、通信・世界の交通地域・移民と交易等の課題を各個に展開する。ただ、繰返すまでもなくその包摂する学問分野は極めて広く項目も参考文献も著者の偉大な学問的蓄積を証したるに充分であらう。

第四部「生産と原料加工の技術」は、人間の最も基本的な産業活動についての章節によつて満されている。その構成はユニークなものであり、狩獵・漁撈・遊牧・移牧等と内容とする「動物界の利用」、森林の掠奪利用・植林・農耕道具の進歩・その地域的偏差・農業機械化等を体系づける「土地利用技術の形成」、干拓・治水・灌漑等の問題を一括して対象とする「水の技術」、移動耕作・輪作・施肥・園芸耕作等を一貫して取上げる「土地肥沃に關する技術」等によつても、研究課題の整理方法の斬新さが理解されよう。ところで、以上のように、夫々の技術をメルクマールとした分析的な経済活動の把握の仕方とは、「その技術が」多少共絶えず相互に依存し合つてい

る」(p. 765) という反省の結果、一応打切られるのである。そして改めて総合・結合の観点から「耕作・飼育の業績——動物・植物世界の征服を目的とする人間努力の効率を測定する為の尺度となる業績——の上に一般的な考察」(p. 765) が向けられて行くのである。即ち第五章「耕作・飼育の様式とその産物」がそれであり、主として集約度の点から分類された各様式は、適切な例証を伴つて具體的に描き出され、極めて明確な尺度を構成している。(p. 768-783) 次に論述は転じて鉱工業に展開されて行く。とりわけ興味深いことは、人間の基本的欲求を満す為の必需品に關する工業活動を、「食糧と住居」・「織物の地理」として整理した点である。過去の業績の最も華やかな歴史的蓄積を持つ繊維工業に關する部分は、数多くの例証にも富み、最も注意さるべき章節の一つであらう。

第二巻を終えるにあたり、結論として「人文地域 (regions humaines)」の設定がなされている。即ち彼によれば、人文景観の富とヴァリエテは「共に、自然環境の資源が人口分布に提供する可能性と人類集団によつて當ま

れる技術の不均衡な進歩との間に介在する懸隔に由来する」(P. 1014)のである。このような観点に立ち、地理学者として初めて人文地域の設定を試みたH. J. フリニールの方法を参照しつつ、彼独自の地域区分をなすのであるが、それは「絶対的なものでもなく、決定的なものでもない。変転極らない現実の一スナップである」(P. 1015)と解釈するのである。ということは何よりも現実の政治的な枠(cadres politiques)を地域区分の際の一つのエレメントとして複合させた結果に他ならないのであつて、フリニールに学んだと称しながらも、それは全く異つた趣の人文地域が描き出されるに至つた。参考までに簡単に紹介してみよう。

A、その領域が、種々の気候、種々の性格を持つた地域にわたつて広大な拡りを示し、その間に或る程度の自給自足が可能である二大国家。即ち政治機構、経済構造において対照的でありながらも、以上のような国家経済的な見地から合衆国とソ同盟をこのジャンルに属さしめる。

B、エネルギー資源の欠除に基づくか、或い

は単に進化の停滞の故に、工業的な色彩を全く伴わない歴史の古い田園文化(civilisation rurale)の地域。即ち、久しきにわたり、より進歩した地域の為に広大な市場としての性格を呈示して来た地域である。更にこの中で、農業牧畜技術が高度に科学化されたデンマーク型、工業化の進んでいない東ヨーロッパ、地中海型、工業が最近まで農村的(rural)職人的(artisanal)であつたシナ・インド型が分類される。

C、世界経済の機構の中で、工業化された地域に動物・植物・鉱物の原料資源を供給しつづけて来た地域。その第一の型は人口過剰とプランテーションによつて特色づけられる東南アジア・東インド諸島であり、第二の型として、悪条件な自然環境と貧弱な歴史相続に由来する恵み少き熱帯・亜熱帯アフリカ、第三の型として、イペロインデアアン時代から今日に至るまで、合衆国やヨーロッパ諸国本位に開発されて来た南アメリカをあげるのである。

D、純粋に農業的文化を持つている地域とは全く対照的な、工業文化が支配的な国家。

イギリスがその典型であり、工業の発展の為に農業の利益を犠牲にした過去の歴史が想起されよう。同時にドイツ・ベルギー・日本がこのジャンルに該当するが、通じてこれらの諸国は農業国を弱めるか時には破壊し去らうと協力するのである。

E、伝統的な農業を維持するにせよ、近代の工業国家に漸次発展しつつあるにせよ、何れにせよ均衡を保つ国々。フランス・カナダ・チエツコスロヴァキアがこのカテゴリーに含まれる。しかしながらこの均衡は不安定で保全するに困難な性格のものであり、換言すれば、多くの国々にとつてこの均衡の状態は通り道(étape)にすぎない。

ところで以上のような地域区分がなされるに至るまでの分析の過程が、充分科学的であるといふよりもかなり直観的であるとの印象を評者は強くするのであるが、更に、たとえ恒久的なものではないにしても、均衡を保つ地域」の設定選択にあつては著者の主観が唯一の判断のよりどころではなかつたかと疑われる。何れにせよ、現代の世界情勢の下では、孤立的な政治変動や社会変革は最早

ありえないのであつてこれらの人文地域の夫々が急速に変貌の様相を示しつつあることを、著者と共に一つの革命として荘嚴な感動のうちに受けとらう。

以上紙面の許す限りにおいて、一・二巻を通じて認められる体系と構成の概要を紹介して来たわけであるが、詳細な内容についての検討は今後に残された課題としたい。最後に本書の著しい特色を改めて述べれば、従来の通論なり概説なりが、集落地理・工業地理・政治地理・社会地理等の、いわば因習的な枠内での横の並列であつたのに対して、生態学的な理解の仕方や、「技術」という概念内容でこの枠を破壊し、縦の系列に置換えた方法論の斬新さにとどめを刺さう。これはたとへば二巻四部の結論として示された農業と工業との密接な取扱いの仕方や、或いは間接的に知りえたところであるが、第三巻「居住地」における、イングランド炭田やフランコ―ベルジャン炭田地域に立地する農村の、変貌する経済生活についての叙述の中にも、その具体的な例を見出すのである。

ソルのいわゆる「基礎」は、上述のように

地理学の縁辺への積極的、半ば侵犯的な学問的情熱によつて生み出された所産ではあるが、案外、人文地理学の「本質」なり「原理」なりはこの点に存在するのではなからうか。

—末尾至行—

執筆者紹介（執筆順）

- |       |                  |
|-------|------------------|
| 岡部健彦氏 | 奈良女子大学講師         |
| 竹田聰洲氏 | 關西大学講師           |
| 藤沢長治氏 | 京都大学大学院学生        |
| 海野一隆氏 | 大阪学芸大学講師         |
| 樋口隆康氏 | 京都大学講師           |
| 上田正昭氏 | 京都市鴨沂高校教官        |
| 有光教一氏 | 京都大学文学部助教        |
| 末尾至行氏 | 京都大学大学院特別研究<br>生 |